11月19日　出エジプト記2章1～10節

説教題：「私たちの神は救いの神」

今日与えられた聖書箇所は引き続き旧約聖書から、前回の創世記に続いて、出エジプト記の主役であるモーセ誕生の出来事を学んでいきます。旧約聖書におけるモーセの誕生は、新約聖書におけるイエス様の誕生と並んで、とても重要な出来事として理解されています。それは、当時のイスラエルの民がエジプトで奴隷として生活していたことを考えると、彼らをエジプトから導き出すモーセがいなければ、イスラエルの民は神様から約束された土地に帰ることが出来ませんでした。そういう意味で、モーセの誕生は非常に重要な出来事でありました。

当時のエジプトではヘブライ人（イスラエルの民）の男児は殺してしまうように定められていました。しかし、よその子でさえかわいく感じる赤ちゃんですから、自分の子どもはどれほどかわいく感じたことでしょうか。その赤ん坊を、「川に投げ入れて殺してしまえ」と言われても、それを実際に実行できる親は少なかったのではないでしょうか。

生後しばらくは隠されて、ナイル川に流されてエジプトの女王のもとで育ったモーセは、その名前に示された「引き上げる」という意味の通りに生きることとなりました。エジプトという、縁もゆかりもない土地において、奴隷という低い立場に置かれて、男の子が生まれたら殺すように強要されて、エジプトの宗教を信仰し、神様への礼拝をすることが出来ない、そのようなどん底の状況のイスラエルの民を、神様が栄光の民族として「引き上げて下さる」、その希望としてモーセは用いられることとなりました。この導き出しの業を、救い出しの業を知っているからこそ、イスラエルの民は、どのようなどん底の状況に陥ったとしても、「それでも神様が助けてくれるに違いない」という希望を持つことが出来たのです。

そのように、私たちの神様は、悲しみのどん底にいる人に、苦しみ嘆いている人に、孤独に打ち震えている人に救いの手を差し伸べる、やさしい神様であります。救いの中に入ることが出来る人が一人でも増えるように、たった一つの民族ではなく、すべての人が救いの中に入るように、イエス様をこの世に遣わしてくれました。自分の大切な独り子を、たった一人の男の子を、この世に遣わしてくれました。その幼子は、十字架で死ぬ運命を背負いながら、クリスマスの夜に生まれたのです。私たちの救いのために、私たちに愛を教えるために、イエス様はお生まれになったのです。そのことを、自分の向けた愛の出来事として受け止めながら、クリスマスまでの日々を共に進んでいきましょう。

今日の説教箇所：出エジプト記２章1～10節

・1:レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見ていると、そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引き取って乳を飲ませ、:その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた（マーシャー）のですから。」